

吉備国際大学研究紀要
 (人文・社会科学系)
 第22号, 105-111, 2012

『海辺のカフカ』にみられる仏教的要素

小林 隆司・南 征吾*・岩田 美幸・平尾 一樹・保積 功一**

The Buddhistic elements in “Kafka on the shore”

Ryuji KOBAYASHI, Seigo MINAMI*, Miyuki IWATA, Kazuki HIRAO, Koichi HOZUMI**

Abstract

The purpose of this study was to clarify the structure of the Buddhistic elements in “Kafka on the shore”. Qualitative method was adopted in this study.

As the structure of this story, the chief characters were input into Shikoku as *attracted place*. Although they felt only *a comfort* occurred from the *perception of the Shiki-soku-zeku (all is vanity)* at a beginning, they had *the change of the viewpoint* occurred from the *perception of the Ku-soku-ze-shiki (Vanity make all)* at the end.

We suggest that the sense that all phenomena relate mutually is the one of the elements of healing.

Key words : Haruki Murakami, Buddhism, Kafka on the shore

はじめに

最初に断わっておくのは、この論文は、村上春樹の『海辺のカフカ』¹⁾の解釈や謎解きではないということである(やりたくても、そのような知識も技術もないが)。もちろん、質的手法を用いてある種の解析は実施したが、それよりも『海辺のカフカ』

という物語にインスパイアされて、仏教の空思想や般若心経について調べてみたというのがいちばん近い線である。また、多少、物語の筋にも触れざるを得ないので、謎解きを求める人とまだこの作品を読んでない人は、この先に進まないほうがいいかもしれない。

さて、小森²⁾は、『海辺のカフカ』の多くの読者

吉備国際大学保健医療福祉学部作業療法学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8

*Department of Occupational Therapy, School of Health Science and Social Welfare, KIBI International University
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

* 吉備国際大学大学院保健科学研究科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8

*Graduate School of Health Science, KIBI International University
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

** 吉備国際大学保健医療福祉学部社会福祉学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8

*Department of Social Welfare, School of Health Science and Social Welfare, KIBI International University
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

が「癒し」や「救い」を感じた点に強い危惧や危機感を感じたとしている。しかし、そのような批評があるにしても、私を含めた多くの人がなぜ癒しや救いを感じたか³⁾を考えてみることは、保健医療福祉専門職が慢性疾患を抱えて生活せざるを得ない人たちや終末期にある人にサービスを提供するにあたって役にたつこと⁴⁾だと考える。

ただし『海辺のカフカ』が癒しや救済の物語として読まれた要因の一つに、その販売戦略をあげる人もいる²⁾。しかし村上が、「…というわけで、『泣けた』とか『癒し』とかいったことばだけは宣伝に使わないでほしいと、僕は新潮社宣伝部に注文を出しています。…」³⁾と語っているように、少なくとも私が目にした広告では、その点では、抑制された内容になっていたと思われる。販売戦略ではなく、テキスト自体もしくは物語構造にその要因が求められるのであれば、それはどのようなものだろうか？

私は、2009年のイスラエル最高の文学賞「エルサレム賞 (Jerusalem Prize)」の授賞式でおこなった村上の記念講演のなかの一節⁵⁾から、彼の父が時々僧侶をしていたことを知った。彼の子ども時代の環境が影響して、なんらかの仏教的世界観が彼の作品から染み出しているのであれば、そこに癒しや救済を感じたとしても不思議はないと私は考える。なにしろ仏教は、約2500年もの間、苦しみの救済について検討を重ねてきたのだから。

そこで私は、この作品の中の仏教的要素について考察しようと考えた。ただし、すでに平野⁶⁾が村上春樹と仏教もしくは「空」について深く論じている。そのような優れた先行の知見に、この研究がなにかをつけ加えることができれば幸いである。

方法

『海辺のカフカ』の中から、「仏教」もしくは「空」と関係ありそうな部分をまず抜粋し、基礎データと

した。そして、グラウンデッドセオリーアプローチ (Grounded Theory approach) を援用して以下の手順で分析を実施した。①切片化：データを意味単位ごとにわけた。②コーディング：切片化された文章（一文のこともあれば複数の段落にわたる場合もあった）ごとに短い言葉からなるコードを付けた。コーディングの際には繰り返し原文に戻りながらそれらの適切性を十分に確かめた。③カテゴリーの生成：コーディングされたデータを比較し、類似したものを集めてより抽象度の高い名前を付与してカテゴリーとした。④ストーリーラインの作成：カテゴリー間の関係性を考慮に入れて、ストーリーラインを作成した。ストーリーラインとは、生成したカテゴリーやコードからなる簡潔な文章で分析結果を示したものである。なお、コーディングとカテゴリーの生成は、MAXQDA 10を使っておこなった。

結果

『海辺のカフカ』から抜粋した23の切片から、9つのコード、7つの下位カテゴリー、5つの上位カテゴリーが得られた（表1）。以下に概念図（図1）とともに、ストーリーラインを示す。文中では、上位カテゴリーを【 】, 下位カテゴリーを< >で表している。

ストーリーライン

まず、主人公らが【ひきつけられる場所】は、遍路の地として知られる四国であった。主人公らがこの場所に入力され、何らかの変換がなされて、出力されるのがこの物語ともいえよう。変換の最初は、<無常>、<無明>、<空性>といった【色即是空の知覚】である。これは主人公らにとって【いごちのよさ】を提供した。そして空を一度知覚した者は、ニヒリズムに陥ることなく、そこから立ち現われた、【空即是色の知覚】によって、再度の変換を

表1 生成されたカテゴリーおよびコード

上位カテゴリー	下位カテゴリー	コード	切片数
ひきつけられる場所	ひきつけられる場所	ひきつけられる場所	1
色即是空の知覚	無常	無常	2
	無明	無明	5
	空性	空っぽ	6
皆無		5	
空即是色の知覚	すべてがあり，部分はない	すべてがあり，部分はない	1
いごちのよさ	いごちのよさ	いごちのよさ	1
見え方の転換	見え方の転換	見え方の転換	2

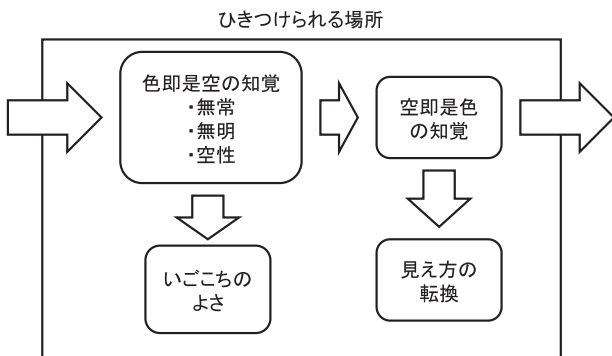


図1 『海辺のカフカ』における仏教的視点の概念図

被る。それによって主人公らは【見え方の転換】という果実を手にするのであるが、ただしそれは何か教訓をえたとか生きかたがかわったとかそういうものではない。

考察

ここでは上位（中核）カテゴリーごとに、その内容を分析・考察することとする。

1. ひきつけられる場所

行く先は四国ときめている。四国でなくてはならないという理由はない。でも地図帳を眺めていると、四国はなぜか僕がむかうべき土地であるように思える。何度見ても、いや見るたびにますます強く、その場所は僕をひきつける。

この物語は、15歳の田村カフカ少年が、東京都中野区野方の自宅を出て四国で住みさすらう様子を描いたものである。Guzzoni⁷⁾は、「住まうこととさすらうことは、私たちが何でありかつ何でありたいのか、また私たちがどうありかつどうありたいかを、明らかにしてくれる二つの道である」と述べている。そこで、まず主人公が住みさすらった場所を考察することで、この物語のありようを多少たりとも明らかにしようと思う。

私が主人公の住まう場所で印象的だったのは、甲村図書館と大島兄弟のキャビンである。この二つに中野区野方の自宅を加えると、これらの場所を交流分析の3つの自我状態で説明することも可能だろう⁸⁾。中野区野方はP（親・Parent）の自我状態であり、両親や親的役割を果たした人のような行動をとり、また、彼らのように思考し感じているときを表している。この物語では父性が特に問題となっている。甲村図書館はC（子ども・Child）の自我状態であり、自分の子ども時代（のある瞬間）と同じように行動し、考え、感じているときを示している。この物語では母子関係や少年少女時代が問題となっている。大島兄弟のキャビンは、A（成人・Adult）の自我状態で、現在、大人としての能力に基づいて現実吟味を行い、「今・ここで」の反応として行動、思考し、感じているときを示している。サダさんの言葉を借りると、恐怖を乗り越えて一人前になることを教わる場所である。主人公は親の庇護から脱し、子

どもと大人の間を歩きつ戻りつしながらなにかを得るわけだが、その得られたものが明白でないところに、この物語の（単なる教養小説でないという）特徴が表れている。

一方、さすらう場所としては、図書館に隣接した海辺とキャビンに隣接した森が特筆できる。この物語では、これらの場所は此岸と彼岸の間の場所として描かれているが、まさに多くの修行僧が、さすらう（遍路する）場所として四国にひきつけられてきた。四国遍路は、修験者の遊行+補陀落観音信仰の基盤の上に弘法大師遊行信仰が加わって成立したとされる⁹⁾。補陀落とは、梵語のポータラカからきた言葉で「海の果てにある観音菩薩の浄土」をさすという。昔の修験者は、補陀落渡海の拠点である足摺岬をめざし、破れ衣で歩き続けたのである。また、弘法大師遊行信仰とは、今もお大師様が毎日かかさずお影をみせておられ、かつて自分が人びとのために行った事業の跡、さらには修行の旧跡や足跡の村々を見て回っておられるというものである。こういった信念が、四国を一周する遍路巡拝において、一人で巡拝するのであっても、お大師さまと共に心身をみがき、いつもお大師さまと共にあるという「同行二人」の精神につながったと考えられる。この物語の主人公は、浄土を目指した修験者のように、父の呪いから逃れるために、お大師様ではなくカラスと呼ばれる少年と二人で四国をさすらったのである。

2. 色即是空の知覚

その世界には字もないし、曜日もないし、おっかない知事さんもないし、オペラもないし、BMWもない。はさみもないし、丈の高い帽子もない。でもそれと同時に、ウナギもないし、あんパンもない。

〈無常〉とは、移り変わり同じ状態にはとどまらないことをいう。あらゆるものが〈無常〉であることを諸行無常といい、これは仏教の旗印のひとつである。お釈迦様は、この世のすべてのものは〈無常〉にして変遷していくものに過ぎないのに、そのことを理解せずそれに執着してしまうことから人の悲しみや苦しみが生じると考えた。

お釈迦様は、そのような執着から解脱を果たした後に、人間の苦しみの生起するプロセスを十二縁起によって説明したとされている。すなわち、老死←生←有←取←愛←受←触←六入←名色←識←行←〈無明〉である。それぞれの項目の説明は、長田¹⁰⁾に従い、表2に示した。十二縁起は人間の苦悩の原因が究極的には〈無明〉に帰するということを明らかにしたと同時に、〈無明〉を減らすことができれば、苦しみを減らすことが可能なことを表明している。では、どうしたら〈無明〉を減らすことができるだろうか？

その点について竹村¹¹⁾は、ナーガジュルナの『中論』を引用して、大乘仏教に至ると、〈無明〉を減らすということは、知による縁起の修習によって可能と考えられるようになったとしている。そして、その知による縁起の修習とは、ただその因果関係を

表2 十二縁起

項目	内容
無明	正しい知識をもっていない
行	誤った認識によって行為（業）が生み出される
識	行為の結果が意識の中に蓄積されていく
名色	その意識によって次の人生の心と体が形成される
六入	体の形成に伴って感覚器官が生じる
触	感覚器官が対象と接触する
受	接触によって「心地よい」「苦痛だ」などと感受するようになる
愛	心地よいものを求める欲望が生じる
取	欲望の対象執着心が生じる
有	蓄積された業と執着が次の生の因となる
生	新たな肉体に生まれ変わる
老死	老いと死の苦しみ

観ずるだけでなく、一切の事物の自体が〈空性〉であることを見ることにまで達する必要があると述べている。一切が〈空性〉であることを説いた最も有名な経典が『般若心経』である。この経典では、『海辺のカフカ』にも再々でてくる「あれもない、これもない」という表現（上記参照）が多用されている。

是故空中，無色，無受想行識，無眼耳鼻舌身意，無色声香味触法，無眼界，乃至無意識界，無無明，亦無無明尽，乃至無老死，亦無老死尽，…（玄奘訳）

したがって、無実体という点からすれば、ものも無く、感受も無く、想念も無く、意志も無く、識知もない。眼・耳・鼻・舌・身・意も無い。（この六官の対象となる）もの・音声・香・味・触・法（心的対象）も無い。眼の領域から意の領域に至る六つの領域も無い。明知も無く、無明も無い。明知が尽きることも無く、無明が尽きることも無い。かくして、老・死も無く老・死の尽きることも無い。…（金岡訳¹²⁾）

このような空の考え方の基盤には、お釈迦様の説かれた「中道」があると言われる¹¹⁾。これは、快楽に愛著・耽溺することと、苦行に苦しむことの両極を捨てることである（だから否定でしか伝えられない）。これが後に、有・無の二見を離れること（つまり空）も意味するようになってきたとされている。『般若心経』の事物を固定的にみてはいけないという考えは徹底していて、上述の十二縁起の無明や老死という仏教の最も大切な教義さえも無いという（上記参照）。

3. いごこちのよさ

自分がいったい何かという問題が、ナカ

タさんの横にいと、もうどうでもいいようなことに思えて来るんだね。比較するのはいささかオーバーかもしれないけど、お釈迦様かイエス・キリストの弟子になった連中も、あるいはこんな具合だったのかもしれないな。お釈迦様と一緒にいるとき、俺っちなんかこういい気分なんだよな、とかさ。

『海辺のカフカ』で、生きているとも死んでいるともいえない〈空性〉なるキャラクターは、ナカタさんと佐伯さんである。二人とも半分しか影がない。二人とも若き者（ナカタさん：中身のない星野青年、佐伯さん：ひどく損なわれた主人公）に愛され、【いごこちのよさ】を与えた。しかし彼らは、なにも言わずに、死んでいく。ナカタさんと佐伯さんはどうしてあっさりとうたくなってしまふのか？このストーリーから思い浮かぶのはお釈迦様の自灯明の教えである。

お釈迦様は入滅前にひどく体調を崩した時があった。回復後、弟子のアーナンダーは、お釈迦さまがなにも言わずに逝ってしまわれるのではないかと、これからどうしたらよいのかと不安になったことをお釈迦さまに伝えた。するとお釈迦様は、自分はすべてを公開して秘蔵しているものなどない、これからは、自らを灯明とし法を灯明としなさい（自灯明・法灯明）と諭したとされている。ナカタさんと佐伯さんの死は、主人公らが自分で自分の問題を解決していくしかないことを示唆していると思われる。

4. 空即是色の知覚

そこにはすべてがある。しかしそこには部分はない。部分がないから、何かと何かを入れ替える必要もない。取り外したりつけ加えたりする必要もない。

一切皆空の思想は、すべてのものに価値がなく、

その時々状況に身を任せて、流れるように生きるしかないという態度（受動的ニヒリズム）に陥る可能性を秘めている。

この点について立川¹³⁾は、「問題は、『空』に至った後、虚無の中に住むのか、われわれにはすべてのものがないのか、思惟の墓場の中に住まなければならないのか」と述べている。しかし、立川は続けて、「そうではなく、否定されるものはわれわれの具体的にはわれわれの言葉、思惟であり、われわれの思惟や言葉が否定された後、それはまたよみがえってくると空の思想は説く。このよみがえってくる場面が、『般若心経』では空即是色という句によって表現されている」と述べ、空における否定はよみがえらせるための否定だと考えている。

梶山¹⁴⁾はまた、空の作用について、「すべてのものに実体や本質がない、ということが空性であります。事物は実体をもたず、原因・条件に依存してのみ生じる。つまり、縁起したものである、ということが空義の理解であります。そして、ものが空であるということが、あらゆる世間の言動や慣行を、実体としてではなく、仮の現象として成立させるということ、それが空の効用（空用）、空のはたらきであります。」と述べている。

この物語は、予言という苦悩を抱える少年が、空なる人物と接することによって、すべてのものに（予言でさえ）実体がないことを悟る（色即是空の方向）と同時に、すべてのものが縁起した現象として存在する（空即是色の方向）ことを知るものだと考えることもできよう。小説の終わりに、たぶん他人である可能性の高いさくらさんに主人公が「お姉さん」と言ったことや、カラスと呼ばれる少年がカフカ少年に「目が覚めたとき、君は新しい世界の一部になっている」と言った場面は、すべてのものが関わり合いを持っていることの象徴であるかもしれない。全ての事象が連関しつながらあっていることの知覚こそが、この物語のもつ癒しの要素の一つになってい

ると考えられる。

5. 見え方の転換

俺は自分がすごく変わっちゃったみたいな気がするんだ。なんていうのかね、いろんな景色の見え方がずいぶん違ってきたみたいだ。これまでなんということもなくへろっと見てきたものが、違う見え方がするんだよ。それまでちっとも面白いと思わなかった音楽が、なんていうのかね、ずしっと心に沁みるんだ。

四国という辺境で、主人公らが得たものとは結局何だったのだろうか？地位とか名誉とかそういうものでないことは明白である。しかし人間的成長というのとも違うのではないだろうか。というのも、最後の最後まで主人公は、「生きるということの意味がわからないんだ」と口にしてからである。

私は、ここでは記憶ということがポイントになっていると考える。佐伯さんがカフカ少年に求めたものは、「私のことを覚えていてほしい」ということだった。また、星野青年はナカタさんの遺体に向かって、「これから何かちょっとしたことがあるたびに、ナカタさんならこういうときにどう言うだろう、ナカタさんならこういうときにどうするだろうって、俺はいちいち考えるんじゃねえかってさ。…略…。つまりある意味ではナカタさんの一部は、俺っちの中でこれからも生きつづけるってことだからね。」と独白している。誰かを記憶するということは、自分のなかに対象を住まわせ、その対象の目線で物事を考えるということにちがいない。

このことは、ラカンが、「人の欲望は他者の欲望である」と述べたことに通じる¹⁵⁾。ラカンは、自我の独立性を否定し、他者の鏡に反射したものとしてのみ存在しうると考えた。自我を否定し、縁起によってのみ存在すると考えるのが仏教の空である。結局

主人公らが得たものは、＜空性＞なる人たちの記憶とそのまなざしによって、浄化され立ち現われた事物の世界で、それは、ことばでは正しく伝えることのできない【見え方の転換】された世界であるというのが私の考えである。

おわりに

この物語で私が一番好きな言葉は、大島さんが

言った「愛というのは、世界を再構築すること」である。この言葉はまさしく、『1Q84』で展開された、圧倒的な暴力によって損なわれ歪められた世界（たぶん内面的な世界）が何によって再構築されるかというテーマの1つの答えになっていると思う。『海辺のカフカ』で問題となった個人の心の救済は『1Q84』では世界にまで拡張されている。機会があれば今度『1Q84』に挑戦してみたいと考えている。

文献および註

- 1) 村上春樹：海辺のカフカ。新潮文庫。東京。2005。

『海辺のカフカ』の初版は2002年9月に刊行された。解析には文庫版の第2刷（2005年3月発行）を使用した。

- 2) 小森陽一：村上春樹論『海辺のカフカ』を精読する。平凡社。東京。2006。

- 3) 村上春樹：村上春樹編集長 少年カフカ。新潮社。東京。2003。

例えば、この本の中に出てくる読者のメールに、「私は昨年『うつ病』になってしまい、1年近く仕事を休んでいます。病院に通い抗うつ剤を服用していますが、何もやる気がせず、基本的に家から外に出ない生活でした。『カフカ』を読み終えて私のうつ病が簡単に治ったわけではありませんが、陳腐な言い方しかできませんけれど『元気をもらった』というのが感想です。…」というのがある。

- 4) レイモンド・カーヴァー（村上春樹訳）：Carver's dozen—レイモンド・カーヴァー傑作選。中央公論社。東京。1997。

この本の中に、「ささやかだけれど、役にたつこと」という作品がある。

- 5) “My father passed away last year at the age of ninety. He was a retired teacher and a part-time Buddhist priest.”（私の父は昨年90歳で亡くなりました。父は元教師で、時折、僧侶をしていました。）

- 6) 平野純：ゼロの楽園 村上春樹と仏教。楽工社。東京。2008。

平野はこの著書の中で、「仏教の諸経典をかじった者が村上春樹を読んだならば、そのほとんどの者が、印象的に表現された中観派の核心的な緒観念を、いたるところに、発見するだろう。」と述べている。

- 7) ウーテ・グッツォーニ（米田美智子訳）：住まうこととさすらうこと。晃洋書房。京都市。2002。

- 8) 松田勇、小林隆司、香田康年：本科学学生の自我構造と基本的構えの1・4年次の経時的変化について。吉備国際大学研究紀要。保健科学部20：51-56, 2010。

- 9) 村上保壽：大師信仰と遍路の歴史。加賀美智子編。遍路学。高野山大学。2004。

- 10) 長田幸康：知識ゼロからの仏の教え。幻冬舎。東京。2008。

- 11) 竹村牧男：インド仏教の歴史。講談社。東京。2004。

- 12) 金岡秀友：般若心経。講談社。東京。2001。

- 13) 立川武蔵：空の思想史。講談社。東京。2003。

- 14) 梶山雄一：空入門。春秋社。東京。1992。

- 15) 新宮一成：ラカンの精神分析。講談社。東京。1995。